

『記録史料と歴史研究』

歴史研究の基本となる記録史料をテーマとして、史料と研究をめぐる諸問題について講演します。文学部人文学科歴史学コースの教員2名が、それぞれの専門分野にかかわる記録史料を紹介、史料から明らかになる歴史像のみならず、それら史料の性格、史料を利用する際に留意すべき問題、史料の保存や管理にかかわることについて、自身の経験をまじえつつ、歴史学への興味・関心を持っていただけるよう講演します。

近世フランスの港湾都市における諸活動を記した文書（大峰真理）、英領期ミャンマーにおける地方行政文書とその特徴（岩城高広）をとりあげます。

日時 平成30年11月4日（日）13:00～15:30

会場 千葉大学 西千葉キャンパス
人文社会科学系総合研究棟2階 マルチメディア会議室

対象 高校生以上の方

受講料 無料

申込 申込みは不要ですが、座席数に限りがあります
ので、受付は先着順となります。

※当日は大学祭中のため、お車での入構はできません。

主催 千葉大学文学部
後援 千葉市教育委員会
【問合せ先】
千葉大学人文社会科学系事務部学部学務グループ
TEL 043-290-3631
E-mail bhgakumu@office.chiba-u.jp





「18世紀フランス海港都市の活動と記録史料 —ナントの事例—」

人文科学研究院 教授 大峰真理

18世紀フランス王国は多くの港町を擁して国内外の様々な場所と交易をしていた。これらのなかから、「奴隷貿易の港」として知られるナントを事例にとりあげ、港町に生きた人々の記録を読み解く。ロワール＝アトランティック県文書館（ナント）が保管する様々な記録史料（写し）をみながら、当時の人々のいとなみを再構成し、港湾都市の実像を描出する。



「英領期ミャンマー人村役人による文書作成 —王朝期文書との対照—」

人文科学研究院 教授 岩城高広

19世紀末、イギリス植民地となったミャンマー（ビルマ）では、役人として植民地政府につかえた現地の人たちがいた。そのうち、村で徴税にあたっていた役人が作成した文書を紹介する。文書の形式をみると、王朝時代に地方から中央へ送られた文書と似ており、これを手がかりにして王朝時代と植民地時代との過渡期の歴史像について考えてみる。